

ISSN 0910-2396

野鳥たより

—北海道—

第 69 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 昭和62年9月21日



ツルシギ 1983. 9. 15 ウトナイ湖 撮影者 畠山 佳幸

宮島沼の水鳥

草野貞弘

I 宮島沼の名の由来

美咲市西美咲町大富……沼の所在地です。

向こう側にいる人影はおろか、岸辺の雁の影さえ、肉眼でははっきりとわかるほどの“小さな沼”が宮島です。小さいと言っても比較の問題で、水面積30ヘクタール余、石狩川が残したあまたの沼のなかでは最も大きい部類に属します。

その石狩川は、この地で大きく湾曲して流れていました。大富という地名は、大曲と富樫の両集落が合併つくられた新しい呼び名です。川の湾曲部に、開拓の先人たちは大曲の地名を残しました。富樫農場に因んだのが富樫の地名の起りです。湾曲部の内側は、宮島佐次郎という人が払い下げを受けて農場を営営しました。その農地に隣接していた沼を、いつしか人々は宮島沼と呼ぶようになりました。

雁満沼（かりまんとう）と宮島を呼ぶのは、歴史的な経過は存在しません。

原始石狩川は、ここらで逆巻く波を立てながら回流していました。川の曲がりの内側には、静かな湾ができていて沼につながっていたことでしょう。アイヌ語では、Kar-i ma un to（まわる 入江 いつもある 沼）と呼ばば、ここら辺りの地形に合致するし、当て字に『雁で満たされる沼』を使えば、ロマンを感じるのではないかと筆者が創作したものです。

石狩川の氾濫が、土地をえぐって創ったものか、川が残した河跡湖なのか、或はそれらの複合型なのか定かではありません。

II 沼の地理的位置と用途

地図を見てください。月形町から峰延への、樺戸道路が石狩川を渡りきったすぐ北側に、沼は泥炭地特有の濁った水をたたえて静かに横たわっています。

この沼は最深部でも2メートル程で、白鳥の首が届いて沼底の水草の根を掘とれる深さしかないぐらいのところが多いのです。だから、底土の

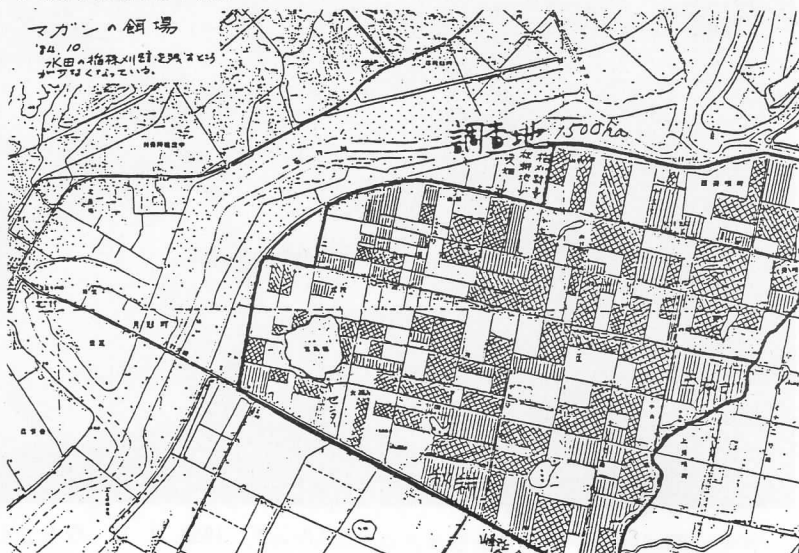
黒さとあいまって太陽エネルギーをよく吸収し水温が高くなるのです。春先の田植え時には、稚苗の成育がよいので、灌がい用水として付近の農家が協同で水利権を得て大切に使っています。

III 沼の水鳥

毎年3月末から、小群で姿を見せだすとまたたく間に群が大きく多くなって、4月半ばの沼開きから月末までに沼周辺に集結するマガンが、宮島沼のメインです。次に、沼で今までに見た水鳥の簡単な目録を記しておきます。

ガンカモ科

マガン	アメリカコハクチョウ
ヒシクイ	コガモ
オオヒシクイ	ヨシガモ
シジュウカラガン	ハシビロガモ
ハクガン	マガモ
カリガネ	オナガカモ
コクガン	カルガモ
オオハクチョウ	キンクロハジロ
コハクチョウ	ヒドリガモ
コブハクチョウ	シマアジ他鴨類数種類
クイナ科	
バン	オオバン



カイツブリ科

カイツブリ アカエリカイツブリ

サギ科

アオサギ アマサギ チュウサギ

カモメ科

ユリカモメ

その他

シギ科、チドリ科各種、ショウドウツバメ、カワセミ

水鳥ではないが、沼の周辺で見られる鳥

オジロワシ、アオジ、ムクドリ、コムクドリ、ノビタキ、アリスイ、ヒヨドリ、コヨシキリ、オオヨシキリ、キジバト、モズ、ホオジロ、オオジュリン他……

IV マガンについて

1. マガンにとっての宮島沼

日本で越冬したマガンの殆どが、春4月に宮島沼に集結します。マガンは学名で *Anser albifrons*、英名では White-fronted Goose です。前部が白い雁という呼び名のように、全額部に白い毛が見えるのを特徴にしています。

宮島沼に集まってから、4月末から5月初旬にかけて、一息にここから営巣地のシベリアに向かうのだといえます。

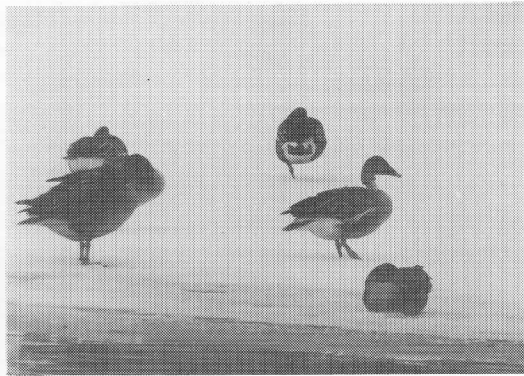
オオヒシクイ (学名 *Anser fabalis middendorfi*) は、道北のサロベツ原野にある沼が日本での最終集結地ですし、コハクチョウはクッチャロ湖、オオハクチョウは濤沸湖、ヒシクイは、十勝の生花苗沼に集まってから北へ向かいます。それぞれ、種よっての集結場所の違いがあるのも面白いことです。

マガンの越冬地は、宮城県伊豆沼です。以前は全国各地に広がっていたといいますが、雁の棲めるような湿地帯が日本から無くなってしまったのです。北上川流域に残された伊豆沼周辺だけにしか、雁の冬越しをする自然の場所が存在しないのです。

3月、マガンの大部分は、伊豆沼を後にして秋田の八郎潟に向かいます。そこから、ウトナイ湖に飛んで数日を過ごしたあと、順次500、1000、と隊列を組んで美唄の西部にやってきます。宮島沼の水が開けると、ここをめぐらに、まわりの水田にでかけて、落ち穂を餌とするのです。日本では、ここ以外には、マガンの集結場所は発見されていないので、宮島沼が日本最終最大のマガン北帰拠点と言われるのです。

ウトナイが空になってからも、マガンは宮島沼にまだ飛来してきます。ウトナイ湖を経ないで、宮島沼に来る、別の渡りのコースがあるのではないかと考えられますが、解明されないままになっています。

4月末からの、いわゆるゴールデンウィーク中に、マ



オオヒシクイ (首環の鳥)

ガンは北へ旅立ちます。どこの経路をとるのかまだ判っていないのですが、北緯70度のシベリアで雛を育てたら、その家族単位で秋には日本に渡ってきます。群れが小さいので、見落としがちですが、宮島沼周辺での9、10月にも、親子連れのマガンがほんのちょっと立ち寄ります。

2. 標識鳥

近年、標識をつけた個体を観察することで、渡りをはじめ、成長、採餌場所、集団形成、家族形成などの様子が解明されようとしています。マガンの場合、約2万2千羽のうち、青い頸輪をつけた標識鳥は6羽です。

01Y 02Y 04Y 05Y 06Y 07Y、青地に白文字の6羽は、'83. 11. 28宮城県登米郡迫町松原で、『雁を保護する会』によって標識輪をつけられました。翌年春、6羽は全部揃って元気に宮島沼に現れました。その後、'85、'86、'87と、美唄西部に今年で4度も立ち寄って、雁に関する色いろな情報をもたらしてくれています。子別れのように、餌場移動、グループ状況、つがいの行動、新しいペアリングの始まりなどが観察されるのも、鳥の標識がものをいいます。(別表1参照)

別表1. 標識鳥

標識マガン一覧		
標識場所	宮城県登米郡迫(はさま)町松原	
標識日時	1983年11月28日	
着標識者	『雁を保護する会』事務局長 呉地正行他	
雌雄別	ナンバー	備考
♀	01Y	幼鳥 右肢輪
♀	02Y	幼鳥 肢輪なし
♀	04Y	左肢輪
♀	05Y	左肢輪
♂	06Y	左肢輪
♂	07Y	05Y と夫婦

標識鳥では、シジュウカラガンに黄色の首輪をつけたのもいます。008。仙台市八木山動物公園で生まれたシジュウカラガンは、絶滅種を回復すべくマンガンの群れに混ぜてシベリアに帰す実験の標識ナンバーです。

008は、5月6日に約2000とともに北へ旅発ったと思ったら、11日に宮島沼に15羽と戻り、12日に9羽で飛び上がり、14日、7羽になっていなくなりました。しばらくしての27日、また単独の1羽っきりで、008は宮島沼に戻ってきました。シベリアには、行けなかったようなのです。沼に残っていた、右翼を傷めたマガン1羽と連れだって、あるいは、やはり病んで北へ旅立ってないオオハクチョウ数羽と一緒に、マコモやミズドクサの新芽をついばんでいます。(5/10現在)



標識マガン

シベリアは行けないまでも、なんとか元気に沼で過ごし、秋に南下する雁の群れに合流して欲しいものです。

3. 今年(1987年春)のマガン状況略メモ

- 3/23 マガン初見 西美唄町山形上空27羽+50羽
- 3/29 宮島沼オジロワシ3羽、山形上空90羽のマガン
- 4/3 西美唄元村神社前の雪の水田上にマガン520、別群228、ハクチョウ19
- 4/4 上美唄町南の手形沼東水田上雪面にマガン918羽、宮島に白鳥79羽
- 4/7 手形北側にマガン417、オオヒシクイ1羽、コハクチョウ12羽、宮島沼にオオヒシクイ11、コハクチョウ33。結氷の沼上にてマガン越冬する
- 4/9 宮島沼雪上をめぐらとした数4~5000羽。上美唄中央270、北村中小屋に500、大曲3区 455+コハクチョウ72、山形06Yを含む600羽
- 4/12 大曲3区1500、こんべいとう沼北500、三角沼北300、中小屋300、手形東に05Y.07Yを含む360、手形沼北にF-1×2が2組含む1167羽、すすき4000、中美唄590、(この日マンガンのアルビノ2、008、コクガン来る)
- 4/16 山形05Y.07Y、蛇沼アルビノ2、全体像が掴みにくいマガンは一萬羽以上
- 4/18 昨日04Y、今日元村02Y……一萬五千羽以上
- 4/23 宮島沼開く。昨夜、台風並の風に、沼の氷が立ち上がり叩きつけられて割れ、一夜にして水面が出た。008、アルビノ沼に入る
- 4/26 沼のマガン約二萬羽、白鳥1700。01Yを見る
- 4/29 008/02Y/05Y. 07Y/06Y/F-1×4/コクガン/カリガネ沼に浮く

(VTR撮影画像での計測平均19,378羽)

- 5/5 北帰の旅発ち。3:54-4:46に北へ去る。6:

美唄宮島沼での標識マンガンの初見日					
No.	'84	'85	'86	'87	
01Y	4/22	4/4	4/9	4/26	・最初是一緒だったが後年はバラバラ。
02Y	4/22	4/15	4/9	4/18	
04Y	4/22	4/13	4/16	4/17	
05Y	4/23	4/9	4/13	4/12	
06Y	4/22	4/21	4/29	4/9	・05Y. 07Yはいつも一緒。
07Y	5/3	4/9	4/13	4/12	

30までに沼に帰る数2900羽。この結果、五群に別れた夜明け前後の北帰は約一万八千羽。

- 5/6 アルビノ2羽、008を含む最後の群れ午後3:53に2000羽飛ぶ。残500

- 5/7 16:15マガン250羽

- 5/11 16羽が沼に戻る、そのなかに008

4. マガンの観察時期

4月中旬から下旬、遅くとも5月3日まで。お天気の良い日の9時~14時の沼面、または日没前後に雁がぬぐらの沼に帰る午後5時半~6時半。(雨天は不帰沼)

V 沼の保全

宮島沼は禁猟区ではありません。

国際的な渡りをする雁や白鳥の、重要な拠点にも係わらずなんの保護保全策もとられていません。周りの農家との調和を考えた、『指定餌場』を設定したいと思います。そこでの水田減反を止め、“落ち穂”を確保するのは。餌場を守る、なんらかの手だてが、天然記念物のマンガンの為になされるよう望むものです。

(JAWGP 雁を保護する会 会員)

マガンに餌場を

☆雁の集結地

春4月、日本で越冬していたマガン（雁）の殆ど全部が、ここ美唄市西美唄町の宮島沼に集結します。

沼から、朝と午後の二度、近くの水田に、稲刈りあとに落ちている粃を食べに飛立ちます。凡その一ヶ月、この繰り返して十分にエネルギーを蓄えてから、ひといきにシベリアへ向かって旅立っていくのだといえます。天然記念物マガンの、日本最終の集結地が宮島沼とその周辺の水田地帯なのです。

マガンは、土地への執着心の強い鳥です。先祖代々同じ土地へしか降りません。雪融け直後の、黒い土が出なかった水浸しの水田に降りて、採餌します。融雪ラインにしたがって、餌場を移動し、行動範囲が沼近くになった頃には、月も代わって五月となり北への出発の時期が来てしまうのです。

最近、このマガンの餌場に、大きな変異が起きてきました。水田が少なくなってきたのです。次は1985年春の、雁の餌場に見られた例です。

調査地 美唄市西美唄町、上美唄町

(宮島沼、手形沼を含む代表的な餌場1500㌔選定)

調査日 1984年11月

全面積 1500㌔

耕作地 1260㌔ (84%)

非耕作地 240㌔ (16%)

(道路、防風林、排水溝、住宅用地、沼など)

耕作地のうち

秋蒔麦作 522㌔ (34.8%)

秋耕済地 348㌔ (23.2%)

(稲作後に耕した田圃で、粃は無い)

稲刈跡地 390㌔ (26.0%) マガンの餌場

稲の切り株を残した水田が、マガンの餌場となる所です。表からわかるように、雁が餌場として選んだ1500㌔のうち、実際に使える所は四分の一の面積しかなかったのです。

雁にとって悪いことに、この年は、前秋の豊作で落ち穂、落ち粃が非常に少ない状態となっていました。しかも、秋の天候が大変に良くて農作業がはかどり、稲刈り後の水田が耕されました。耕されなくても、コンバインで収穫された後の稲藁は、含まれていた落ち粃も一緒にして焼き払われてしまったのです。

春4月、一万二千羽に達するであろうマガンには、餌



マガンのアルビリ

となる落ち穂に極端に恵まれない状況になってしまいました。

☆マガンの不審な死

1985年春、雁は予想通り、約1万2千羽が美唄に集まってきました。最初に雪が融け出すのは、融雪剤を撒いた小麦畑です。青い麦芽が雁のくちばしに襲われました。それしか、雁には食べるものが無かったのです。融雪ラインに沿って、稲刈り跡を探しても、マガンには落ち穂を見つけだすのは困難でした。彼らのくちばしでは、もう固くなって掘りだすのが大変な乾いた水田にも、何度も降りて餌をさがしました。そして餌が無いと、小麦の芽に集中するのは自然のなりゆきでした。

害鳥と化したマガンは、農民に追われながらも生きるために麦の芽、茎を荒らしました。その麦が、降雪まえにたっぷりと雪腐れ防止剤を散布されていたとしても、天然記念物のマガンにその罪はないのです。この地に、マガンが集まりだしてから初めて、この年8羽のマガンが死にました。オオハクチョウ5羽、コハクチョウ4羽も命をひきとりました。原因を特定されないまま、痩せて咳こんで死んでいきました。こんなに大量の事故死は、今までにありませんでした。

数例は、大学の研究室で解剖され、薬物による中毒死と判定されましたが、毒物の断定までには至りませんでした。

もっとも、麦の食害については、追跡調査の結果では、実害は殆ど無かったように推定できました。雁の食害は、麦の地上部分だけで、根までにはおよばないので、五月

初旬にマガンが北へ去った後で再生された芽茎からでも、十分に麦は収穫されたのです。食害よりも、肥料とか排水などの他の生育条件のほうが、麦の収穫に大きな影響をもっているように思われます。農家が受けた、感情的な被害はいつまでも残ったままではありますが……。

☆雁の数の変化

人間の、果てしない開発の欲望は、雁、白鳥、鴨、鴨などの水鳥、或は原野にしか棲めないシマアオジ、ノゴマ、ノビタキ等の生存を脅かし続けてきました。沼さえも、人は埋めて滅ぼしてしまいます。

渡り鳥は、休息の場所を奪われて、とってかわるコースもないままに、その数を急速に減らしてきました。彼らの先祖が暮らしていた自然は、何処にも存在しないのです。やっと探した美唄の沼では、鉄砲の照準器が、彼らの姿を捕らえてしまうのです。

それでも、美唄の沼地を、日本で冬越しした全部が北帰途中の最終集結地としているマガンについて見てみると、数の上だけからは明るい傾向を知ることができます。

次の表は、1971年に天然記念物に指定されてからの、マガンの数の推移をまとめたものです。

保護が徹底すれば、シベリアで営巣する渡り鳥でもこんなに増やすことが出来るということを実証するものです。

☆マガンに餌場を

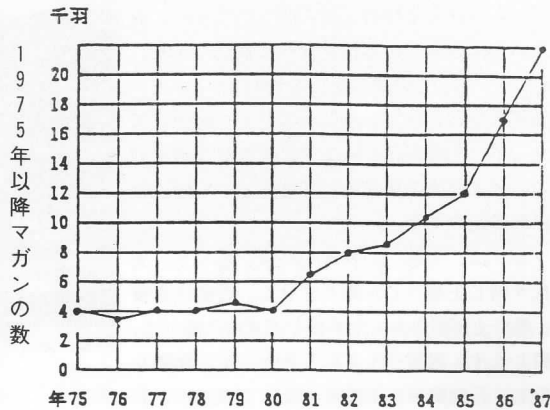
ただ、数が増えれば、それに見あだけの餌場が要ることになります。美唄の西部水田に存在する落ち穂の絶対量が、雁が要求する総量を満足している間は良いのですが、その年々の作柄次第で落ち穂の量は不安定です。また、作付け自体転作水田の状況が変化するので、雁の増えかたに対応できるのかどうか、早急に対策をたてる必要がありそうです。さて、その保護対策ですが、最も効果的かつ農民の支持が得られ、人間と野生生物の共存が保障されるものでなければなりません。

一例をあげれば、マガンの餌場となっている西美唄町、上美唄町それに、中村町と開発町及び豊葦町、北村の豊正と中小屋地区、月形町の一部にまたがる、石狩川沿線の水田地帯を〔雁の餌場〕に指定するのです。

① この水田地域では、一切の転作を無くします。水田だけの、もともとこの地が開拓された終局の姿に戻すのです。水田単作、これは農民の希望と一致する筈です。農家は、普通に田圃を作り、普通に収穫します。収穫後の落ち穂が、翌春には雁の餌に保障されることになりま

☆マガンの増減グラフ

1971年当時、宮島沼周辺に立ち寄るマガンの数は、計測しませんでした。1500羽前後だったと記憶しています。1975～1986年の最大羽数を、概数でグラフに示します。



② この地域の農家には、転作奨励金に相当する〔仮称、餌場奨励金〕が国から支給されることにします。それは、秋耕や藁焼きを禁止し、もし仮に収穫前に水鳥等から稲が被害を受けた場合の補償に相当するものです。仮に、秋、多少の被害があったとしても、農家は普通に収穫してよいのです。刈り取った稲作跡に、落ち穂が残っていることが雁には必要なのです。

③ 餌場の該当地域は、前述の美唄、月形、北村の市町村です。当然、宮島沼は、禁猟区に指定されます。

④ 関係市町村に於いては、水鳥からの農作物への食害を補償するための、必要条例を制定してもらいます。実害のパーセンテージは、極小さいものですが、手塩にかけた農作物が荒らされるという、精神的な被害をも勘案したものとすることにします。

以上の水鳥被害補償が実現するならば、宮島沼が禁猟区に指定されても、鴨の被害が少々あったとしてもそれは農民の納得が得られることになるでしょう。国は、天然記念物に指定するだけで、他に何もしないのなら、つまり指定のしっぱなしだけでは、(狩猟禁止措置はしてある)野生生物の保護にはならないと思うのです。天然記念物に見あだけの、早急な保護政策の実施がまたれます。

雁は国境を越えてはばたく渡り鳥です。国際的にも、恥ずかしいことのないような保護の道が求められるところ

「十勝と釧路の野鳥」の発刊と今後

藤 卷 裕 蔵

今年の5月に日本野鳥の会十勝支部は釧路支部と共同で「十勝と釧路の野鳥」を発刊した。

1978年に日本野鳥の会が環境庁の委託を受け自然環境保全調査の動物分布調査(鳥類)の一環として鳥類繁殖調査を行なったが、私たち十勝の会員もこの調査に参加して十勝地方での調査を行なった。これらの記録をそのままにしておくのは惜しいので、探鳥会や会員の観察記録を加えて十勝の鳥類目録をつくることにした。これが「十勝の野鳥」(1980)である。この目録によって、十勝地方全域にわたる鳥類の生息状況が初めて明らかにされた。しかし、その後新たに記録された種が増加したことや、またこのような出版物に対する要望が多いため、今回釧路地方も含め改訂版を出すことにしたわけである。

十勝地方についてはかなり記録が蓄積されており、完全とは言えないまでも、記録は十勝地方全域をカバーしている。釧路地方についてもこれまでに記録が蓄積されており、今回は梅本正照(白糠)、二村一男(標茶)、橋本正雄(主として釧路周辺と釧路湿原、阿寒湖周辺)、百武充(川湯付近)、黒沢信道(浜中)、柳谷源悦(音別)などの各氏の論文や観察記録を使わせていただいた。

内容は、291種についての簡単な説明と具体的な観察記録(地名と年月)である。また記録の多い96種については分布図で分布をしめしている。前回の「十勝の野鳥」に収録したのが239種であったから、50種近くが増えたことになる。もちろんこれは釧路地方も含めたことにも原因がある。また釧路地方を含めた分布図を見てみると、

同じ「道東」といっても少し違うところがあることがわかる。例えば、オオセグロカモメは繁殖期に海岸沿いに広く分布しているが、繁殖地は主に釧路地方であること、クロツグミが十勝より釧路で少ないこと、シマセンニュウの分布は十勝ではかなり限定されているようであることなどである。

今回、この目標をつくるにあたって、記録の集め方についていくつかのことに気附いた。まず鳥を観察している人は各地にいるが、それぞれホーム・グラウンドのようなものをもっていて、珍しい鳥を観察するようなきを除くと、それ以外の場所ではあまり観察していないようである。どこでも見られるような普通種を見にわざわざ遠くまでかけることはないからであろう。したがって記録のある所は、観察する人がいる所である。釧路地方の場合も5万分の1の地形図では「上茶路」、「ウコタキヌブリ」、「阿寒」、「徹別」に相当する地域の記録がないに等しかった。分布図を描いてみると、オアジのようにどこにでもいる鳥の場合さえ空白のメッシュがあるのである。どの種でも、どのような所でもまんべんなく継続して記録をとることの難しさをあらためて感じた次第である。

それから記録として利用しようとしても使えないことがあった。せっかくの貴重な記録のだから後で使えるような形で残しておいた方がよいと思うのである。いくつかの例をあげてみよう。釧路地方の鳥類目録で、場所、年月日が記入されているのであるが、スズメ、カラス2

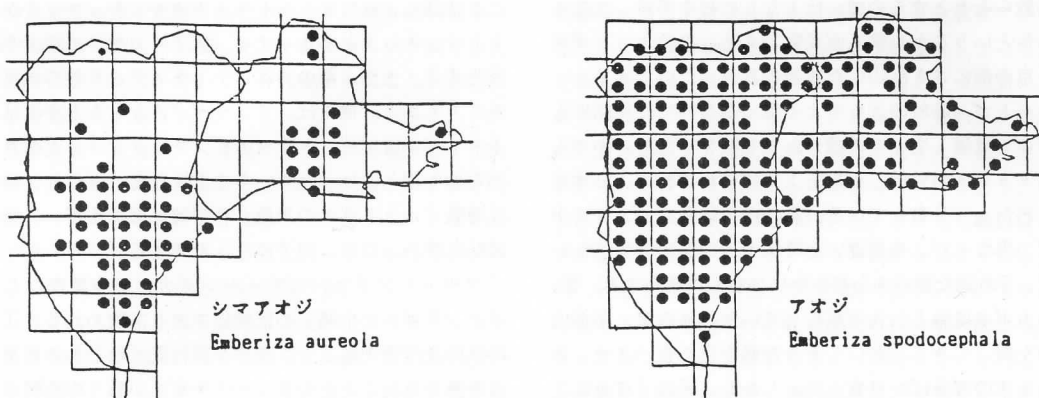


図1. シマアオジとアオジの分布図
(丸一つは1/2万5千の地形図に相当)

種については「記載省略」なのである。目録を作成する場合には、具体的な観察記録にもとずくわけで、たとえどんなに普通に見られる種でも同じ扱いにすることが大切である。また場所の記述があいまい、例えばその地名の範囲が広過ぎて5万分の1の地形図上でどのあたりかを明らかにできないため、分布図の資料としては使えなかった(分布図の示し方にはいろいろあるが、私はメッシュで示す方法がいまのところ最善と考えており、今回もこれを採用した。もちろんメッシュの大きさが問題とはなるが) (図1参照)。

この改訂版の編集を始めたときは、北海道東部の鳥類目録をめざして根室地方も含めるつもりであったが、観察記録の集まりかたがわるいため、残念ながらあきらめた。根室地方についてはすでに「根室地方の野鳥」(根室自然教育研究会 1981)が出版されている。ただしこれは種のリストと各種の詳しい説明が中心で、珍しい種の記録以外については具体的記録がなく、今回のように

記録の集積と分布図を目的とする場合には資料的価値は低い。

次に改訂版を出すときには、是非とも根室地方を含めたいと思っている。また十勝に接する日高地方、上川地方南部も加えたいと思い、今年からボチボチ調査を進めている。またもし、可能なら北海道全域についても同じような記録をまとめたと考えている。このような調査に関心のある方には是非ともご協力をお願いする次第である。記録は北海道であれば、地域を問いません。

なお、「十勝と釧路の野鳥」を希望される方には実費(1冊800円、送料200円)でお分けしています。

(申し込み先: 080帯広市稲田町 帯広畜産大学 野生動物管理学研究室内 日本野鳥の会十勝支部。送金はできるだけ郵便振替(小樽8-6831 日本野鳥の会十勝支部)をお願い致します。

(帯広市稲田町西2線13)

聞きなしの民話

(4) ホトトギス四種

武 沢 和 義

先日「野鳥だより」の編集会議のとき、人にあまり好まれない鳥のことが話題になり、騒がしく鳴き叫ぶヒヨドリも、あまり好感を持たれていないようだ、ということになった。ホトトギスはウグイスと並んで昔から詩人や歌人に好まれてきた鳥であると思っていたが、ヒヨドリと同じような理由で、ホトトギスは嫌いだという意味の歌を伴家持が万葉集に載せている。家持が坂上大嬢(おおいらつめ、人名ではなく大阪弁のいとはんと同じような言葉)に見せようとして大事に育てていた橘の花を、追っても追っても戻ってきて鳴きながらホトトギスが散らそうとするので、仕方なしに枝を手折って花を贈ったということを読んだ長歌である。当時ホトトギスは、京の都にさえ沢山いた普通の鳥だったのである。

ホトトギスは村の近くでよく鳴く鳥なので、民話にも一番多く登場して、その聞きなしも数多くある。中でも「ホトトギスの兄弟」が最もよく知られており、日本全国にわたって分布している。話の内容は地方によって少しずつ異なるが、その違いを吟味するのが目的ではないので、平均的な話のあら筋をかつまんで紹介する。昔、ホトトギスは弟と二人で暮らしていた。ある日、弟が山の芋を採ってきて、おいしそうな処を兄に食べさせ、自分はずの部分ばかり食べた。しかし、兄は「自分にこんなおいしいものを食べさせてくれるぐらいだから、弟はもっとおいし処を食べているに違いない」と邪推し

て弟を責めた(多くの民話では、兄は目が見えなかったり働きに出ていたりして、山の芋は弟だけで料理する)。それを聞いて弟も腹を立てて「そんなにいうなら俺の腹を裂いて調べたらよい」といったものだから、弟の腹を割ってみるとくず芋ばかり出てきたので、兄は大変に後悔し鳴き叫んでいるうちに、とうとう鳥になってしまった。それでホトトギスは今でも「弟恋しや、弟恋しや」と昼も夜も、毎日八千八声鳴くのだそうである。ホトトギスの口の中が赤いのも鳴きすぎて血を吐いたためという。オトトコイシヤの部分の聞きなしになっているが、ここは話によってオトットキッタカキョキョキョとかオトトツキッタとかホッチョ(庖丁)カケタカのように変化する。また、弟の方はホトトギスでなく他の鳥になることもある。例えば、ミソサザイになったときには、ホトトギスはアチャトンダカ、コチャトンダカと鳴きながら弟を探しまわったということになる。また、この話は普通「ホトトギスの兄弟」と呼ばれているが、兄弟が姉妹に変わったり、母子になったりする。

アチャトンダカ、コチャトンダカという聞きなしは「ホトトギスと小鍋」の民話に主として使われる。江戸時代の旅行家である菅江真澄が旅行記「はしわの若葉」に平泉で見たこととして、ホトトギスが鳴くのを聞きながら「町さへ往ったけとか」と真似をしていたと書いている。さらに続けてホトトギスの別名として五月鳥、田

植え鳥、小鍋焼の名をあげ、「ホトトギスと小鍋」の民話を紹介している。なお、小鍋焼とは家庭で行なう共同の炊事ではなく、こっそりと別火で行なう個人的な炊事のことである。昔、貧乏な兄弟がいて、弟が兄に隠れて小鍋焼をやったが、食べ過ぎてしまって、苦しがりころげまわっているうちに背中が裂けて死んでしまった。そしてその亡魂がホトトギスになって「あっちゃとてた、こっちゃとてた、ぼっとさけた」と叫び鳴いたという。

この他に民話と結び付いている聞きなしにはホンゾンカケタカとかトトサヘカカサヘとかガンコガンコ等があるが、全てを紹介すると長くなるので割愛する。ホトトギスの聞きなしそのものとして有名なテッペンカケタカや特許許可局のようなものは、面白いというだけで話としては成長しない。

トトサヘカカサヘ（父へ母へ）というホトトギスの鳴き声は子供の死ぬ前兆として畏れられたものであったが、同様の民話がカッコウにもある。母親が子供を背負って山道を通っているとき、「はやこう、はやこう（早や来う）」とカッコウの鳴く声が聞こえたので、ふりかえってみると背中の子供が死んでいたという話である。このような話から、これ等は「冥途の鳥」と呼ばれることがある。原始、古代の昔から鳥は魂の運搬者と考える信仰があり、とりわけ夕暮れから夜、さらに明け方にかけて行動する鳥に、強く死の影を感じていたものであった。その最も典型的な鳥はトラツグミで、ヌエの名でもって畏れられていた。

「カッコウと母子」の民話は少し聞き方が異なっている。カッコウは親不孝もので母親が「背中がかゆいから掻いてくれ」と頼んだが、少しも云うことを聞かない。しかたがないので母親が松の木のコブで掻いていたら、背中が破れて死んでしまった。それでカッコウはやっと自分の親不孝に気が付いて、今でも「かっこう、かっこう」と鳴いているという。

呼小鳥という鳥が、万葉集にたびたび登場する。これが何を指すのか諸説があってよくわからないが、折口信夫はカッコウの鳴き声を「あこう（吾が子）」と聞いて呼子鳥と名付けたのだらうと云っている。さしずめ、一番古い聞きなしということになるらうか。

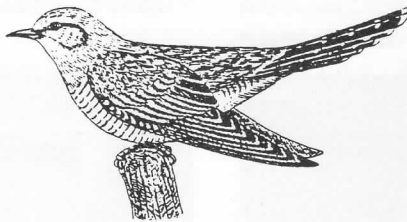
もうすこし明るい話を紹介しよう。カッコウのことを豆まき鳥という地方がある。例えば、信州では毎年五月の半ば過ぎにやってきて、「豆まけカッコウ」と鳴くという。いま、私達が知っている「勝々山」にはカッコウは出てこないが、爺さまが山の畑に行って豆を蒔こうと

していると、豆まき鳥がやってきて「豆まけ、豆まけ」となくので、爺さまは「ひと粒は千粒になれ、ふた粒は万粒になれ」と一生懸命になって豆を蒔いた。そこへタヌキがやってきて「ひと粒はひと粒のまんま、ふた粒はふた粒のまんま」と云って爺さまをからかう、というところから始まる話が伝わっている。

中国でのカッコウの聞きなしとして、読み方は判らないが「布穀、布穀」（種まけ、種まけ）、「各家挿禾」とか「割麦挿禾」というのがあって、いずれも同じような意味を持つ（禾は稲のこと）。日本では布穀鳥はふぶどり読み、ツツドリのことを指す。菅江真澄の羽後（秋田県）での日記「すずきの出湯」に、ツツドリが鳴くと、田畑で働いている人達が「とっとの口に種をまけ、かんこの口に豆をまけ」というと書いている。とっとがツツドリで、かんこがカッコウであるが、真澄は鳥の鳴き始めるのを聞いて種を蒔くというのは、日本も中国も同じだと感心している。ただし真澄は中国でもツツドリのことを布穀鳥というと思っている。ついでに、かんこ鳥がいつもカッコウを指すわけではないということを付け加えておく。蕪村の俳句に「飯櫃の底たたく音やかんこ鳥」というのがあって、このかんこ鳥がツツドリを指しているのは明白である。民話や古典文学ではホトトギス、カッコウ、ツツドリはしばしば混同して使われる。

最後に残ったのがジュウイチであるが、この鳥の鳴き声は愛護会の夜の探鳥会のときも、コノハズクやヨタカの声と共によく聞こえた。その声は名の通り十一と聞こえるので、民話の方でも数を数える話になる。この話は初めに書いた八千八声を数えながら鳴くというものであるが、関敬吾の「日本昔話集成」では「時鳥と計算」の代表例として、ジュウイチが登場する話を載せている。昔、いじわるな継母がいて、柿を十個棚にしまっておいて外出し、帰ってから継娘に十一個しまっておいた柿が十しかない、お前が食べたのだらうと責めた。娘はそんな覚えはないと云ったが、継母が聞き入れようとしないので、とうとう鳥になってしまって「かきとう、かきとう」と鳴きながら飛んで行った。それでも継母は十一だと言いつ張っていたが、そのうち鳥になって「じゅういち、じゅういち」と鳴くようになったという。カキトウと鳴く鳥が何を指すのか説明はないが、他の話から推定するとカッコウのようである。一つ足りないと云って何かを数える話となると、番町皿屋敷のお菊さんが有名であるが、これに非常によく似た民話もある。

ホトトギスの仲間の鳥の一つの特徴は夕暮れ時によく



鳴くことである。柳田国男が「野鳥雑記」に民話と鳥と夕暮れという時間帯の関連についてきれいにまとめているので、その一部を紹介する。「鳥が我々の前に来て最も自由に者を云う動物であることは、恐らくは昔話の特に彼等の為にいつまでも成長した理由の一つであろう。」と推定し、夕暮れ時というのは「(子供達が)物陰を畏れて遠くへは行かずに、心ばかりを誰よりも自由に、働かそうとしたのも此時刻であった。」と考えている。こ

こに色々な村の文学が出来、それが民話や童唄となった。そしてそこに登場するのは、ホタルやコウモリ、鳥ではカリ、カラス、ゴイサギ等である。そしてこれ等は「大抵は皆夕の空の旅人であった。」としている。更に昔話の主人公になったフクロウ、ホトトギス、カッコウ、アオバト等は、皆暮れかかってから鳴き出す鳥であったことをあげ、これは少しも「偶然とは思われぬ。」と結んでいる。そこで次回は夜鳴く鳥の話を書きたいと思う。

誌 上 写 真 展

本年4月20日から5月2までたくぎん自動サービスフロアで、また5月6日から22日まで三菱信託銀行札幌支店で野鳥写真展を行いました。

写真は19人から39点が寄せられました。これらの写真のうち4点は、年4回発行の野鳥だよりの表紙に使わ

せてもらっており、残りの方々の写真については、今回、誌上写真展としてご紹介することにいたしました。

皆様も来年に向け、より一層撮影の方に力を入れてみては如何でしょうか。



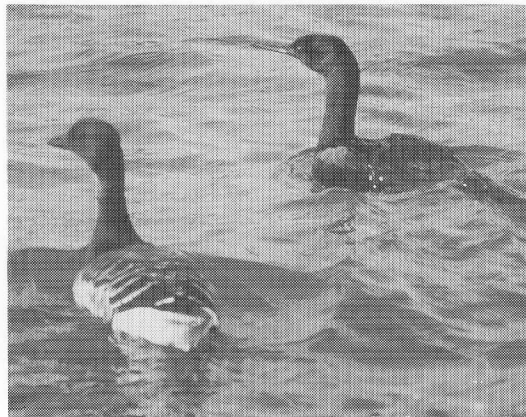
ウグイス 小堀煌治



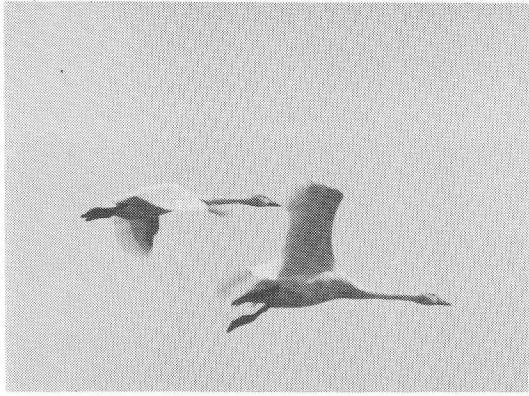
アカゲラ 佐々木武巳



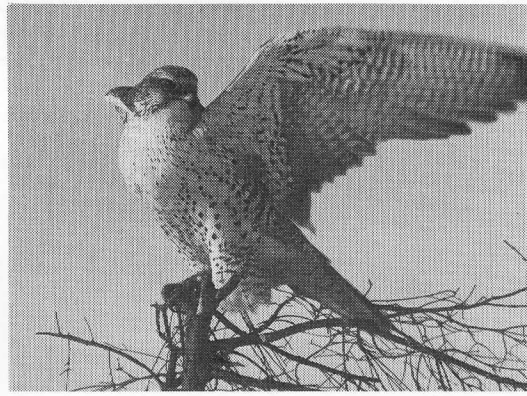
ハイタカ 田中金作



コクガンとヒメウ 富川徹



オオハクチョウ 難波茂雄



シロハヤブサ 船造淳一



カムリカイツブリ 見延誠一



ギンザンマシコ 竹内強



キレンジャク 柳沢信雄



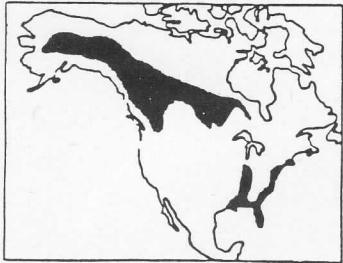
ノビタキ 渡辺紀久雄

珍鳥ニュース

日本への渡来(迷)の記録が過去2回、本道では初めての観察となった「ボナパルトカモメ」の貴重な写真及び観察記録が稀な「カラシラサギ」の写真が会員の福岡研也氏から寄せられました。5月13日白老町社台の別々川の河口でキョウジョシギの正面写真に狙いをつけて撮影中その近くに1羽のカモメと共に更に小さく見馴れない1羽のカモメがいることに気がつき、随分小さいカモメがいるなあーと思い乍ら取敢えずカメラに納め再びキョウジョシギにピントを合せていましたが、どうしても小さいカモメが気がかりになり眼を向けた時には一緒にいたカモメと共に行方不明になり、後でゆっくり撮り直したり観察しようとした事を後悔しました。

体が小さく翼の縁が黒く上面に一本の縞模様グレーの羽根がきれいで足が赤く海面を飛(跳)んだり回ったりせわしい動作を繰り返していたのが印象に残り写真の出来上るのを待って調べてみると国内の図鑑には載っていない珍種であることが判りました。日本での記録が新しく国内の資料も乏しく(国内版には載っていない)詳細に記すことは出来ないが、野鳥1987年3月号に依ると、1985年12月14日、茨城県磯崎岬で若鳥が1羽同年12月19日、東京湾の多摩川河口で、同じく若鳥が1羽観察されユリカモメの群れと行動、茨城県の個体は2日後に不明になり、多摩川のは翌年2月27日迄観察されています。今回の「国外版」と「野鳥」に掲載された写真とが一致確認されたものです。

普通カモメ類は、地上や崖岩等にコロニーをつくり集団繁殖するものが多い中、このボナパルトカモメは、大きなコロニーはつくらず、水辺に近いトウヒ等の針



葉樹林の2~7m位の高さの横枝に木の枝や草こけ等を集めて営巣する。繁殖地はアラスカからカナダ中央部迄と広範囲に及び主に北アメリカ東海岸で越冬、イギリスでは年1~2回記録されています。可成りの粗食家らしく甲殻類、軟体動物、植物や残飯、死体残存物等を食します。鳥名になっているボナパルトは、ナポレオンを連想しがちですが、このカモメの名前は、フィラデルフィア(米)で標本を作った科学者が、動物学者(仏)、ルジャン・ボナパルトに因んでつけたものです。



ボナパルトカモメ

アラスカで生れた若鳥が、一寸方角を間違え南西ルートに入って日本迄来て越冬したものと考えられ大変珍しい記録になりました。写真を提供して下さった福岡氏に敬意を表し惜しめない拍手を送りたいと思います。

本来は、中国南部、北朝鮮などで繁殖ボルネオからオーストラリア迄渡る。日本は、ルートから外れている「カラシラサギ」が5月30日、日高地方静内川の河口で観察されました。

全長65cm、全身白くコサギとチュウサギの中間位の大きさで夏羽では、後頭部から冠羽が出て羽や腰の羽毛も長く飾羽となっている。嘴は、橙黄色(コサギは黒)目先の露出皮膚は青く、足は黒、足指が黄色(チュウサギは黒)冬羽では冠羽がなくなり、目先は黄緑色、足は緑褐色となる。シラサギに共通の長い足にS字形の細長い首がスマートなスタイルを形成し大変優美な旅鳥です。本道では過去3回の渡来記録があり、最近では1985年5月、石狩川河口で観察されています。主に海水の入り込んだ河口、干潟、海に近い湿地だけでカエルや昆虫、小魚などを主食としています。採食方法は変化に富み岸辺で待ち伏せたり、水中を歩きまわったり、魚群のいる浅瀬を活発に走りまわったりして魚をくわえ採り、又泥の中からごかいをくわえ出すこともあるなど同類に共通の行動が見られます。此の写真を撮影中も浅瀬の中を激しく動きまわり採餌中でした。多くのサギ類が、必要とする湿性環境と森林は、経済開発に伴う環境の変化によって次第に破壊される傾向に在ります。最も危険に瀕しているカラシラサギは極めて少数の個体が、香港で繁殖しているがそれが中国全土で知られた、唯一の繁殖コロニーである。北朝鮮からの最近の報告に依るとこの地方で繁殖しているこの鳥の個体数が増加しているらしいと云うことであるが、残れた個体群が、生息数を回復させるの

は、非常に難しいと云れています。

前記2種の他にも私達ウォッチャーにとって見逃すことの出来ない情報が、次々と寄せられていますのでその一部を紹介しましょう。



カラシラサギ

4月26日石狩川流域を探鳥中、石狩町茨戸で意外にも電線にとまっているヤツガシラを福岡研也、道川 弘夫妻が観察しました。ヒヨドリ位の大きさと、頭に大きな冠羽があり体は肌色で翼の白と黒の縞模様が特徴的なので迷わず、ヤツガシラと分ったということです。

この鳥は、沿海州、アジア中央部、ユーラシア大陸と広い地域で繁殖。ユーラシア大陸南部、アフリカ大陸等で越冬します。日本でも繁殖の記録は有りますが、本道では主に春稀れに見られ珍鳥として話題になります。コアカゲラは、4月29日石狩町矢臼場で金上由紀さん母子が、また5月10日と7月19日の2回当別町石狩川公園で

福岡研也氏夫妻が観察、7月には、虫を沢山くわえて林の中へ消えたと云うことですので営巣の可能性が高いと予想されます。コアカゲラは、主に大雪、日高山系以東に生息、南西部での視察は少なく繁殖も稀れとされています。今回は、何れもメスであることに注目されます。

コウノトリは、3月29日と4月5日野幌森林公園で、4月3日～5日ウトナイ湖で認されたことはご存じの向きも多いが、湧別町コムケ沼で8月9日道川 弘氏夫妻、8月13日堀内 進氏が観察(同一個体と思われる)しています。中国北東部沿岸州等で繁殖、中国中南部で越冬のため往来するこの鳥はタンチョウよりひとまわり小さく体が白で黒くて太い嘴が特徴で、淡紅色の足、風切羽根が黒く、声のかわりに嘴を叩き合せてカタカタと音を出します。日本では2、3の繁殖例はあるが、飛来記録は春が主で、夏季に観察されたことは非常に珍しいことです。8月23日当別町石狩川河川敷を探鳥中、10米位の距離でカッコウの幼鳥にノゴマが給餌しているのに福岡研也氏夫妻他2名が、偶然出会いました。托卵で知られるカッコウですが、主にオオヨシキリ、モズ、アオジ、ノビタキ等ですが、ノゴマもその例外ではなかった訳で、7月下旬以後は、お馴染みの鳴き声を聴くこともなかったものが、この時期に仮親のノゴマから甘えて餌を貰っている様も又珍しいのではないのでしょうか。

投稿に当って種々の本等を参考としましたが、詳しくお知りになりたい方は、ご自分で図鑑等でお調べになってみるのも良い勉強になります。

(担当幹事 井上記)



千歳川一泊探鳥会

62. 5. 16・17

見延 誠一

愛護会に入って1年
ならず、渡島の山の中
の小学校という環境と
羽田さん福岡さん戸津

先生ら素晴らしい諸先輩方の人柄と、悪友T氏の「○○見たぞ、来ないか。」と探鳥会ごとにかかってくる魔のさそいの電話のおかげで、すっかり鳥無しには考えられない毎日になってしまいました。

この一泊探鳥会は数多く観察できるとのことで大変楽しみでした。サンポートガーデンでの夕食のジンギスカンをT氏と食べあさった後、夕涼みと出ると左手の森の方から鳴き声。声の仏法僧、コノハズクだということ。ブッキョッキョーとどうも聞こえるのですが、言われるとなるほどブッポウソーと聞こえてきます。ライトで照らすと見えることもあるとのことでしたが、できず残念。

翌朝、寝不足と飲み過ぎで顔はデスマスクのよう。身じたくをしているとキョロロロ…と目が覚めるような鳴き声一発。アカショウビンだ、今日はついてるぞ。開式のセレモニーが終って最初の鳥はイカル。桜の木の中で動き回っているのですが薄暗いせいもあってはっきり確認できません。夜がすっかり明けると少し肌寒く曇りのあいにくの天気。それでも川向こうにヤマセミの姿を確認した時は、感激でした。あの姿、言うことありませんね。♂のバクハツ頭を見たかったのですが、1度も止まってはくれませんでした。麻雀でいえば、アカショウビンでチュンをボン、ヤマセミでハクをボンあとカワセミができれば大三元完成だなとバカな事を考えているとアオバトの声。いました近くの木のでっぺんに1羽だけ。プロミナで姿を十分楽しみました。ダムに着き、許可をいただいで昼食をとりました。木のでっぺんでオオルリが

自慢げにさえずっています。桜の木の下にクロツグミもやって来ました。ダムのでキセキレイがセグロセキレイに追われています。ヤマセミの巣だというほら穴もありました。帰り道はさすがに皆、疲れたのか、言葉少なに心もち速足で歩いていると、休憩所の川向こうの森のてっぺんにツツドリがいました。40倍というプロミナで見せていただきました。下面の横斑で区別できるそうですが、背中ばかり向けてとうとう横斑はわかりませんでした。鳥合わせの結果57種でした。それでも昨年より4種少ないそうです。

なお、この探鳥会の後すぐ鶴川へ行ってしまった私。普通の生活に戻れるでしょう。

〔記録された鳥〕アオサギ、オシドリ、マガモ、カルガモ、キンクロハジロ、トビ、キジ、オオジシギ、キジバト、アオバト、ツツドリ、コノハズク、ヨタカ、ヤマセミ、アカショウビン、カワセミ、ヤマゲラ、アカゲラ、オオアカゲラ、コゲラ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、モズ、カワガラス、トラツグ

ミ、クロツグミ、アカハラ、ヤブサメ、ウグイス、エゾムシクイ、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、コサメビタキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、キバシリ、ホオジロ、アオジ、カワラヒワ、ベニマシコ、ウソ、イカル、シメ、ニュウナイスズメ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上57種

〔参加者〕金上由紀・倫子、矢野昭二・玲子、道川 弘・富美子、田辺 至、福岡研也、加納 真、見延誠一、大野信明、国本昌秀、田中金作・礼子、大飼 弘、忠鉢成一・方子・明子、宗沢美佐子、堀内 進、豊島茂樹、名谷義一、戸津高保・以知子、吉田美千子、宮田 久、大町欽子、今野 弘、松井 昌、武沢和義・佐知子、横谷 茂、谷ロー芳・登志、渡辺かなこ、熊木大仁、竹内強、柳沢信雄・千代子、佐々木武巳、園部恭一、神崎みちえ 以上42名

〔担当幹事〕戸津高保、柳沢千代子、堀内 進

〒049-13 松前郡福島町字千軒

植 苗

植苗の改札口を出ると、顔見知りの方々が既に林の一点にスコープを向けている。覗かせてもらい「ホオジロ」という鳥の名を教えてください。図鑑と照合して「うん、ホオジロだ」と確認し納得する。我々夫婦の探鳥会はいつこんな調子で始まる。

4回目の参加というのに全然進歩がないものだ。この6月で北海道へ千葉より越してきて丁度1年になるが、北海道のメリハリの効いた四季の美しさに感動し、天気の良い週末には殆んど家にいたことがないという生活だ。特に、探鳥会は北海道の自然の美しさを知る絶好の機会と毎回楽しみにしている。

アスファルトの道路沿いには、その姿を見せてはくれなかったが、ヤブサメやキビタキ、センダイムシクイがその声で我々を歓迎してくれた。湖が近づき草原に出るからは視界が拡がり、コヨシキリもすぐ近くで見ることが出来る。遠くのエゾムシクイがしきりに飛び交う。托卵の最中なのだろうか。ノビタキは胸から腹にかけて白い中で特徴のある赤褐色の胸が印象に残る。双眼鏡を向けると突如首を振ったかと思うと、近くを飛ぶ虫を食べたのには驚いた。

今回の探鳥会の最大の収穫は何といっても、シマアオジを見たことだ。幹事の方がシマアオジを見にわざわざ東京から来る人がいるくらい北海道を代表する鳥だとい

62. 6. 14 玉井 龍男

う。さえずりもさることながら、その時の目にも鮮やかな黄色の胸をはっての姿がとても美しい。コリンゴの木に留まっては何度も我々にサービスして登場してくれたので、物覚えの悪い夫婦にも確実に理解できたし、カメラにも収めることができた。

後日我家で行なうスライド映写会を楽しみに足どりも軽く家路についた。

植苗 62. 6. 14 晴 9:10~13:20

〔記録された鳥〕アオサギ、マガモ、カルガモ、ヨシガモ、トビ、チュウヒ、キジ、オオジシギ、キジバト、カッコウ、ツツドリ、アリスイ、ヒバリ、ショウドウツバメ、イワツバメ、ハクセキレイ、ビンズイ、ヒヨドリ、モズ、ノゴマ、ノビタキ、アカハラ、ヤブサメ、ウグイス、エゾセンニュウ、シマセンニュウ、コヨシキリ、センダイムシクイ、キビタキ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、メジロ、ホオジロ、ホオアカ、シマアオジ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ベニマシコ、スズメ、コムクドリ、ハシブトガラス、コブハクチョウ、シラサギ SP 以上45種

〔参加者〕吉田美智子、宇井晴穂、谷ロー芳・登志、岩泉ゆう子、千葉広、宮田久、豊口肇・美代子、関根慎子、西川喜久世、羽田恭子、曾根モト、田中金作・礼子、高倉まり子、母坪宏行・縫子、渡辺和子、中野高明、香川

稔、加藤武俊・美知子・甲人・久佳、綿谷千冬、大町欽子、野口正男、山田道子、小林美智子、霜村耕介、堀内進、玉井龍男・繁美、国本昌秀、見延誠一、戸津高保・以知子、難波茂雄、福岡研也・玲子、渡辺加奈子、武沢

和義・佐知子、竹内強、大野信明、道川弘・富美子、渡辺俊夫、佐々木武巳、井上公雄 以上51名
〔担当幹事〕渡辺俊夫、堀内進

東 米 里

62. 6. 21

〔記録された鳥〕アオサギ、トビ、キジ、キジバト、カッコウ、アリスイ、ヒバリ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、アカモズ、ノゴマ、ノビタキ、アカハラ、エゾセンニュウ、マキノセンニュウ、コヨシキリ、オオヨシキリ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、シメ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ 以上26種

〔参加者〕井上公雄、大浦美佐子、佐川節子、佐々木武

巳、佐藤典子、大坊幸七、竹内強、千葉広、豊口肇・美代子、内藤博光、難波茂雄、温井日出夫・潤子・岳・彩、野口正男、羽田恭子、早瀬広司、福岡研也・玲子、堀内進、松井昌、道川弘・富美子、宮田久、柳沢信雄・千代子、山田甚一・玲子、渡辺紀久雄 以上31名

〔担当幹事〕早瀬広司、渡辺紀久雄

福 移

62. 7. 5

中山雪峰、鈴木友絵、土門雅美、中山葉子

7月5日、福移で探鳥会が行われました。私達は初めての参加だったので、どんな鳥が見られるかとても楽しみでした。

探鳥会の中でも、一番心に残った鳥は、ウズラとベニマシコでした。

世話人の人も「ウズラはめずらしいですよ」と言っていたので、ウズラを見てとてもうれしかったです。

ベニマシコは、オスがとてもきれいでした。

そのほかには、アオサギやホオアカ、オオジュリン、ショウドウツバメ、シマアオジ、アオジなどがいました。

アオサギは今までに何回も見ているので知っていたけれど、ショウドウツバメはあまり見たことはありませんでした。ショウドウツバメを見てから巣も見ました。私達はショウドウツバメの巣を見るのは初めてだったので、見れて本当によかったと思いました。

ホオアカやオオジュリンは、私達は見るのが初めてでした。

シマアオジとアオジでは、アオジの方がよく見かけますが、シマアオジは1回しか見たことがなかったのうれしかったです。

カワラヒワやノゴマ、コヨシキリも見れました。

カワラヒワやコヨシキリは何回も見たり鳴き声を聞いたりしていたので知っていたけど、望遠鏡でコヨシキリを見てみると、口を大きくあけて、とても大きな声で鳴いていました。

カワラヒワは、家のまわりで何回も見れていたけど、とてもかわいらしい姿でした。ノゴマやシメも見ました。

ノゴマはオスののがとてもきれいな赤でした。

シメは前に夏羽のを1度しか見たことがなかったのでまた見れてよかったと思いました。

探鳥会の最後の方でカワセミを見たという人がいました。私達はカワセミを前に1度だけ見たことがありました。カワセミは、もう1度見てみたいと思っていたので見れなかったのが残念でした。

だけどこれだけ鳥が見れたからよかったと思います。

福移での探鳥会は本当に楽しかったです。今度あったらまた行きたいと思います。

〔記録された鳥〕アオサギ、トビ、チュウヒ、ウズラ、イソシギ、ウミネコ、キジバト、カッコウ、カワセミ、アリスイ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ツバメ、ハクセキレイ、モズ、アカモズ、ノゴマ、ノビタキ、シマセンニュウ、コヨシキリ、オオヨシキリ、ホオアカ、シマアオジ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ベニマシコ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、ハシボソカラス、ドバト 以上32種

〔参加者〕五十嵐優幸、泉 一郎、井上公雄、大野信明、小笠原教恵、金上由紀・のりこ、木谷 恭、北村富子、小堀煌治、斉藤市子、佐川節子、佐々木武巳、霜村耕介、鈴木友絵、大坊幸七、田中礼子、忠鉢明子・方子、土門雅美、戸津高保・以知子、富川 徹、豊口 肇・美代子、中山寿子・葉子・雪峰、早瀬広司、福岡研也・玲子、堀内 進、松井 昌、柳沢信雄・千代子、山下敦子・大河・大地 以上38名

〔担当幹事〕早瀬広司、大坊幸七



〔ウトナイ湖〕

11月15日(日)

シベリア中東北部やアラスカなどで夏を越し、越冬のため南下の途中、初めての長旅を経験する幼鳥達と

共に湖面に羽根を休めるハクチョウ、ヒシクイ、マガンやオナガガモ、ヒドリガモ、ミコアイサ等多くの水鳥を観察することが出来ます。昨年は珍しいアネハヅル、ダイサギやオジロワシも含めて34種記録されています。

午前10時 ウトナイレイクホテル湖畔側集合

(往) 千歳空港発9時10分 苫小牧行 道南バス

ウトナイ遊園地下車 (帰) ウトナイ遊園地発 千歳行道南バス 13:24, 14:14

〔小樽港〕12月13日(日)

昨年は5年振りのクロガモ、3年振りのアビを始めシノリガモ、ホオジロガモ、コオリガモ、ウミアイサ、ウミスズメ、ウミバト等24種を確認しています。小樽港から祝津へと移動しての観察になりますので700円程費る

予定です。今年は、どんな鳥にお目にかかれるのか今年からとても楽しみです。ウトナイ、小樽共寒い時季です。帽子、襟巻、手袋、履物等防寒に充分の準備をお忘れなく。午前10時 JR小樽駅待合室集合

〔藤の沢〕1月24日(日)

白鳥園の給餌台に集る野鳥を暖い部屋の中から観察しながら小沢さん自慢の豚汁に舌鼓を打ち探鳥談議を語り合って親睦を深め合います。幹事さんが、特に苦心して用意したクイズ・ゲーム等を催し大変楽しい一日になります。盛沢山?のおみやげも用意されるでしょう。

参加費 500円

午前10時 白鳥園 定鉄バス 定山溪線 藤の沢下車

徒歩 20分

〔野幌森林公園を歩きましょう〕

昭和62年11月8日(日)、12月6日(日) 大沢駐車場入口

午前9時集合

いづれの探鳥会も暴風雨(雪)でない限り行きます。昼食、筆記具、観察用具、雨具等をご用意下さい。探鳥会のお問合せは、011-551-6321 井上まで



鳥民だより

<アンケート>

調査のお願い>

広報部では、会員が会に對しどのようなことを希望しているのか、どのような方が会員になっているのかなどについて、調査を行い、今後の本会の活動の一助に

しようとアンケート調査を実施することといたしました。同封の用紙に早速記入のうえ、すぐに返送くださいますようお願いいたします。

調査結果については、後日皆様に報告いたします。

<探鳥地別探鳥会記録集計書の作成>

本会がこれまでに実施してきた探鳥会で記録された鳥を探鳥地別に経年変化や出現する確率などについてまとめた「探鳥会15年の記録」と言った冊子を富川幹事をチーフに作成中中です。

完成まで、もうしばらくかかりますが出来上がり次第送付の予定です。ご期待ください。

<障害保険の更新>

探鳥会に参加して不慮の事故に会った場合のために本会では、障害保険に加入しております。

○亡くなられた場合 3000万円

○入院された場合 1日 3000円

○通院された場合 1日 2000円

<道主催の野鳥絵画展開催>

道庁では、愛鳥週間用ポスター原画の募集を行いその中から優秀な作品72点を知事賞に決定し、7月13日~18日まで道庁1階の道民ホールで野鳥絵画展を開催しました。

この絵画の募集は昨年からはじめられ、小学校、中学、高等学校部門に分かれており、各部門ごとに上位入賞作品から3点以内を愛鳥週間用ポスター原画の募集に推薦しており、その審査員に本会の谷ロ一芳副会長がなっております。

「クマガラ」-これまでの

活動記録とクマガラ一斉調査-

昭和58年2月、野幌の天然木が伐採されることをきっかけに当会の会員が主体となって「野幌森林公園を守る会」が結成されました。この冊子は、これまでの活動記録をまとめたものです。今年3月には、クマガラ一斉調査を行い野幌のクマガラの生息数調査の報告等貴重な資料と言えます。50頁余のもので一部500円で購入できます。

申込み・事務局 札幌市白石区栄通8丁目3-1

柳沢(011) 851-6364まで

〔北海道野鳥愛護会〕年会費 1,500円 (会計年度4月より) 郵便振替 小樽 1-18287

☎060 札幌市中央区北1条西7丁目 広井ビル5階 北海道自然保護協会気付 ☎(011) 251-5465